

答え合わせ・解説

問1	答え 1 臨済宗	鎌倉時代には、それまでの貴族中心の仏教とは異なり、武士や民衆の心をつかむ新しい仏教が次々と誕生しました。栄西が中国（宋）から伝えた臨済宗は、座禅を組んで修行し、自らの力で悟りを開こうとする「自力」の教えが特徴です。この厳格な教えが、精神修養を重んじる武士の気風に合致し、鎌倉幕府の保護を受けて発展しました。
問2	答え 1 家臣に経済的な基盤を保障することで、忠誠心を引き出し、安定した軍事力を確保するため	武士は「一所懸命」という言葉に象徴されるように、自らの土地を命がけで守る存在でした。將軍や大名は、その土地の支配を公認（安堵）するという強力な特権を与えることで、家臣たちを自身の軍事組織の中に組み込み、政権や領国の安定を図りました。これは律令国家の公地公民制とは対照的な、私的な契約に基づく社会構造です。
問3	答え 1 一遍	鎌倉時代に誕生した新仏教の一つである時宗の開祖、一遍についての問いです。彼は特定の寺院にとどまらず、全国を旅して民衆に直接教えを説く「遊行（ゆぎょう）」というスタイルをとりました。念仏を唱えながら集団で踊る「踊念仏」は、当時の人々に熱狂的に受け入れられ、教えが急速に普及する大きな要因となりました。
問4	答え 1 相次ぐ戦乱や飢饉による社会不安を背景に、世の中の無常さを簡潔な文章で記した。	鎌倉時代は平氏の滅亡や承久の乱といった戦乱に加え、大火や飢饉などの災害が続きました。鴨長明はこうした混乱の中で『方丈記』を記し、固定された住まいを持たず小さな方丈（一丈四方の庵）で暮らす自身の生活を通して、変わりゆく世への無常観を表現しました。他の選択肢は、平安時代の国風文化、室町時代の東山文化、安土桃山時代の文化に関する内容です。
問5	答え 1 分割相続により領地が細分化され、元寇の軍役負担も重なったため、幕府は永仁の徳政令を出して領地の取り戻しを認め	分割相続の繰り返しによる領地の細分化に加え、元寇（蒙古襲来）での軍役負担や恩賞の不足により、御家人の生活は非常に苦しくなりました。借金を重ねて領地を手放す武士が増えたため、幕府は「永仁の徳政令」を發布し、売却・質入れした領地を無償で取り戻させようとしたのですが、これにより経済が混乱し、かえって武士の不満が高まる結果となりました。
問6	答え 2 一遍	鎌倉時代には民衆の不安に応える新しい仏教が次々と誕生しました。一遍は時宗の開祖であり、特定の修行や難しい学問を必要とせず、ただ念仏を唱えることで救われると説きました。この教えを広めるために全国を行脚し、「踊念仏」という親しみやすい形式を取り入れたことで、身分を問わず幅広い層に受け入れられました。
問7	答え 1 代を重ねるごとに一人あたりの領地が細分化され、軍役の負担に見合う収入が得られなくなったため	分割相続は、代を経るごとに個々の御家人が持つ領地を零細化させました。これに加え、蒙古襲来（元寇）での軍役負担が重なったにもかかわらず、防衛戦であったために新たな領地が与えられなかったことが、御家人の困窮に拍車をかけました。これにより、後の時代には領地を分散させない「単独相続」へと変化していくこととなります。
問8	答え 2 永仁の徳政令	元軍の侵攻を防いだものの、恩賞として与える土地が不足していたため、御家人は生活に困窮し、土地を質に入れたり売却したりする者が相次ぎました。幕府は御家人の没落を防ぎ軍役を維持させるため、永仁の徳政令を出して土地の無償返還を命じましたが、結果として経済を混乱させ、幕府への不満が高まる原因となりました。
問9	答え 1 諸行無常	鎌倉時代は戦乱や社会の変動が激しかった時期であり、仏教の「諸行無常（しょぎょうむじょう）」という考え方が人々の間に浸透しました。これは「この世のすべての現象は絶えず変化し、永遠に続くものはない」という思想です。『平家物語』は、一時は絶大な権力を誇った平氏が滅び去る姿を描くことで、この無常観を表現しています。